2014年6月10日発行　　通巻157号

聖書宣教会通信

東京都羽村市羽西2-9-3　Tel:042(554)1710　Fax:042(554)5562　www.bibleseminary.jp　振替00150-6-34971

巻頭言

「良いものは良い」（テモテへの手紙 第二 1章14節参照）

聖書宣教会理事長（川越聖書教会牧師）　**岸本　紘**

清水昭三師は本年3月末までの多難な5年間、聖書宣教会理事長としての重責を担い、神学校の前進と充実のために奉仕してくださいました。ここに改めて心から感謝申し上げます。さて、しばらく前から理事会は後任の選出に手間取っておりました。適任と目され期待された理事が健康の理由で固辞されたために、結果として私が逃れるすべなく、責任をお受けすることになりました。年寄りの出る幕でないことは、だれに言われるまでもなく、本人が重々承知していますが、こうなった今、私の執るべき務めは二つ。応援団の旗を懸命に振り回すこと、そして、その旗を一刻も早く若手に手渡すことです。

私たちはあらゆる分野で今もなお試練を通されています。社会全体の霊的混迷の中で、キリストの教会は善戦しつつも苦闘し、神学校を出た牧師たちはそれぞれに内外のプレッシャーと格闘し、しかも神学校も元気を失いがちではないかと言われたりします。脱出の道はあるでしょうか。

昔、近くの信用金庫が配った小さなPR誌に、町で一軒だけ残った信州の番傘屋さんの、鮮やかなカムバックの話が載っていました。モダンに再生した上品な色とりどりの番傘がグラビア頁を飾っていました。やはり「良いものは良い」ものだった、あきらめる必要はなかったのです。（皮肉にもその信用金庫は倒産しましたが！）私はその雑誌を大事にとっていて、今でもときどき取り出して、それを眺めます。

「良いものは良い」ということであれば、キリストの良いおとずれ以上に良いものが、この世にあるでしょうか。このお方以上に良い、ほんものの羊飼いがいるでしょうか。近頃はサッカーやオリンピックに因んで、リオデジャネイロの丘のキリスト像をテレビでしばしば見かけます。正式名称は『贖い主キリスト』。キリストこそは人類の歴史上、文句なしに最も良いお方であり、受肉し十字架の苦しみを通して勝利の贖いを成し遂げた神の御子、すべての人の救い主です。この方は今もなお、両手を広げてすべての人を招いておられます。この良いおとずれこそは人類が持ちうる唯一無二の良いものです。

この良い方のために生きる人生こそは最良の祝福であり、この良い方のための働きはすべて（残念ながら私たちの罪や失敗のために主を悲しませることもありますが）、本来、良いに違いありません。教会や神学校はみなそれぞれに必ず良いものです。どの教会や神学校が良いとか悪いとかはありません。そこに存在するかぎり、キリストの良いおとずれと良い香りをふりまいているはずですし、教会や神学校の存在自体はこの上もなく貴重で喜ばしく良いものであるはずです。

そうであればこそ、教会は神学校を応援し、神学校も各教会を心から愛し祈ります。教会も神学校も、良いとか悪いとかではなく、効率非効率でもなく、時が良くても悪くても、ただ互いに応援し、祈りあいたい、私はそう思います。各教会の皆さま、どうかこの神学校を応援してください。教師、研修生、職員のため、経済のため、そして神学校が結局は着実に良い実を結ぶよう、お祈りください。愛する卒業生や牧師の皆さま、たまには息抜きに、テストと宿題の縛りの解けた神学校をぶらりと訪ねてやってください。召しを受けたころの、あの初めの愛が再びふつふつと湧いてくるに違いありません。

良い羊飼いであり贖い主であるキリストが、御父と聖霊とともに三位一体の神として、その臨在の恵みにより、神の民の集う各教会の礼拝と日々の歩みを、豊かに潤し満たし続けてくださいますように。

聖書神学舎から

聖書宣教会 校長　鞭 木 由 行

聖書神学舎を覚えて支えてくださる諸教会の皆様へ。主にあってご挨拶申し上げます。聖書宣教会の近況をお伝えいたします。

●新入生

今年度の入会式は、5 名の新入生（男子 4 名、女子１名）を迎えて、4 月 8 日に執り行われました。新一年生のクラスの雰囲気は、とても落ち着いたものですが、そこにはそれなりの理由があるように思われます。実は 5 名の内 2 名が現役の牧師でありながら、それぞれフルタイムの研修生として入会してきました。それぞれが原典における聖書の学びに大変意欲を持って学びに取り組んでいます。週末はそれぞれ自分の牧会する教会に戻り奉仕をして、月曜日に宣教会に戻りますが、その一週間のご苦労は相当なものだと思います。また 5 名とは別に、1 名の方が特別研修コースに入会されました。こちらも牧会経験者で、1 年間休職をして学びを深める計画です。あまり知られていませんが、聖書宣教会には、神学校を卒業した方がさらに学びを深めるための特別研修コースがあり、この働きがさらに用いられていくことを願っています。置かれた牧師の現状を考えて、今年から特別研修コースの研修費を大幅に安くしました。

●体制作り

それにしても、入会者の減少傾向がまた一歩進みました。特別研修生をひとり加えても在籍者数はなお 19 名で、以前は一学年が 17、8 名ということもありましたので、その減少ぶりは顕著です。それでも他の神学校と比べると若干多いと言われます。伝統的に新入生の勧誘などは一切してきませんでしたので、主が送ってくださる方々を迎えて、主が「そこまで」と言われるまで、与えられた使命を果たして行きたいと願っています。研修生の減少で直接的な影響の現れるのは、研修生会活動です。これまでは豊富な人材に支えられ、活動は多方面に拡大してきましたが、今後は係を組み替えるなどして、少しずつ削減していく努力をしなければなりません。一度拡大してしまったことを縮小することはなかなか困難ですが、第一とすべきことがおろそかにならぬよう注意しながら、今後の対策を探っていきたいと願っています。それは、研修生会だけのことではなく、宣教会の事務局や教師会全体にも同様のことが求められているように思います。具体的なことでは、この「聖書宣教会通信」の発送作業があります。毎回、研修生全員でこの発送作業を行ってきましたが、約 8000 部の通信を 1500 箇所以上に発送する作業は現在の研修生数では限界で、今後はボランティアを募集して諸教会からの手助けを得たいと願っています。諸教会と宣教会を結ぶ太い連絡網として、この働きは削れないと思っています。また中庭の草木の手入れなど、もし時間のある方がボランティアで奉仕に来てくださると本当に大きな助けになります。ご検討いただければ感謝です。

●教師会

今年度の教師会の構成メンバーに関して言えば、今年は 8 人体制となりました。昨年松本先生と岡本先生が退任された後、今年は新たに日本長老教会・横浜山手キリスト教会牧師　三浦譲先生（第 29 期卒）が教師としての働きを担ってくださることになりました。聖書宣教会では、内部的に教師と講師の区別をしています。講師は、週に一度時間を割いて教えてくださっている先生方ですが、教師は、運営の主体である教師会に出席し、入会から卒業まで一貫して研修生に責任をもって関わってくださる先生方です。このように教師として聖書宣教会に関わってくださる先生方をさらに必要としています。

●感謝と祈り

（1）昨年度の会計決算が出ました。実は、2 月頃までは赤字覚悟でしたが、3 月になって大口の献金が続き、奇跡を見るようにすべての必要が満たされました。ただ感謝するのみです。

（2）5 月 21 日に荻窪栄光教会の中島秀一先生を迎えて「祈りの日」が、6 月 7 日には「教会音楽のひととき」が、それぞれもたれ、幸いな祈りと音楽のひとときとなりました。

（3）夏期研修講座と教会音楽夏期講習会が準備中です。研修講座では現在ホットな「信仰義認」について具体的なテキストの釈義を通して学びます。諸準備のためお祈りください。

長年、教鞭を執ってくださった先生方が退任されるのは、神学校として大変寂しいことですが、昨年度をもって、四名の先生が退任されました。その内松本任弘先生と内田和彦先生は本当に長い間、聖書宣教会の中心的な働きを担い、忠実な教鞭を執ってくださいました。聖書宣教会の規定に従って、教師会は感謝と敬意を込めてお二人の先生に「名誉教授号」を授与することを決めました。以下はお二人の先生のあかしです。

退職雑感

松本任弘（ただひろ）

この度、曲がりなりにも神学舎での務めを終えることができましたこと、皆様のお祈りとお支えがあってのことだと痛感しております。私が神学舎に入学した時、この神学生は長続きせず、いずれ脱落してしまうのではないか、と心配する人たちもあったとか。

そのような私を主が今日に至るまで、色々なところを通し、導き育ててくださいました。唯々、主に感謝するしかありません。

私を今日に至るまで保たせた二つの指針があります。一つは「聖書は神のことば」。舟喜順一師の神学序論の時間に教えられ、考えさせられ、論理付けられて、徐々に私の心の奥底に植え付けられていきました。そしてそれは卒業後に与えられた順一師の下での五年間にわたる新改訳聖書旧約部門での編集作業を通して更に具体化され、肉付けされました。

次の一つは、「説教はまず講解説教から」です。それは神学舎での羽鳥明師による「説教理論」で教えられました。羽鳥師曰く、「若くして神学校を卒業して行く皆さんは講壇に立たされた時、もっぱら聖書のことばに集中しなさい。世の知恵、知識、学問、人生体験、又、キリスト教の信仰体験においてさえも会衆の方々のほうが上だと考えなければならない」。信仰経験の乏しい若造の私は講壇の説教を恐れていましたが、卒業後、説教の機会を与えられるごとに聖書の講解を試み、徐々にその恐れから解放されて行きました。

私の在任中の一番の出来事、それは全く個人的なことですが、21 歳の一人息子を天に送ったことです。交通事故でした。私は主に「何故ですか」とは言えませんでした。まずは私への神の呪いでした。私は一人の罪人として呪われてしかるべき者です。しかし今は又、あわれみの中に御前に主の恵みを数える者とされています。

この先、私の歩みにどれだけの時が残され、どのような所を通されるか判りませんが、その間、主にある交わりをよろしくお願いいたします。

感謝しつつ思うこと

内田和彦

「杉並区成田西・・・聖書神学舎」。1962 年の夏の hi-b.a. キャンプで、吉枝隆邦「神学生」が高校一年生の私に書いてくださった住所でした。1968 年、大学のレポートを書くために初めて訪問、図書室を利用させていただきました。やがて、そこで学ぶことになり、牧会の傍ら教えることになり、住み込みの専任となって 17 年・・・ということで、瞬く間に過ぎていった半世紀でした。主の憐れみと、主にある皆様のお支えによって、奉仕させていただいたこと、ただただ感謝致します。

還暦を過ぎ牧会に復帰してから、神学校教育について思わされることが多くあります。第一の点は、その重要性です。相対主義、多元主義、人間中心主義が支配するこの時代に、ますます聖書信仰にしっかり立って、福音を弁証できる器が求められています。

第二に思うことは、神学校教育の限界です。どうしても、入学以前に育っていなければならない資質があるように思います。3、4 年の学びと訓練に先立つもの、家庭と教会で長い年月をかけて育てられなければならない「人間性」です。宣教の言葉は人格を通して伝えられるのですから、当然のことなのですが、昨今、改めて考えさせられています。

第三のことは、神学校教育の性質です。カリキュラムは重要ですが、問題はどのように学ばれるか、教えられるか、です。知性か霊性か、という二者択一にならずに、知的訓練と霊性の陶冶が表裏一体となる教育ができたらよかったのだが・・・と、自ら反省することしきりです。パウロのように、「得」と思えるあらゆる賜物を「キリストのゆえに、損と思うようになりました」と告白できる主のしもべに、私自身もならせていただきい。そう願います。

神学校を支え、主が召される器を送り出す教会の使命の重みを、教師を退いた今、一層意識させられています。ただ主の御名が崇められますように。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 2014年度　新入会生 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

左より：天野、渡辺、坂上、新井、古庄

氏　名	出身教会	奉仕教会
（聖書神学舎本科）［5名］		
天野孝則	東京教会 東村山支部教会　イエス福音教団	東京教会 東村山支部教会
新井智也	自由ケ丘キリスト教会　日本福音キリスト教会連合	キリスト教朝顔教会
坂上瑠津子	館林キリスト教会　福音伝道教団	シオンの群昭島森の上キリスト教会
古庄英司	横浜ゴスペルハウス　単立	横浜ゴスペルハウス
渡辺井作	相原キリスト集会　単立	上里キリスト集会

神に導かれて

坂上 瑠津子

自分の思いの全てを手放す決意をし、将来について真剣に祈った時、神様から「収穫は多いが働き手が少ない。（マタイ 9:37）」とのみことばが直接献身の召しとして示され、聖書宣教会に入会することになりました。召しに応答することを決めてからも、献身するのが嫌になったり、怖くなったり、不安になったりしました。しかし、その度に神様が私を憐れんでくださり、みことばや兄弟姉妹を通して私を励まし、献身の召しをより確かなものにしてくださいました。そして、聖書宣教会に入会し、学びをする上で必要な環境の全てを整えてくださいました。

神様が、私を愛してくださり献身者として召していることだけが今の私の確信です。これから勉強面や生活面で厳しいことも多いと思います。しかし、神様が私の弱さも含めて用いてくださると信じ、どんな状況でも感謝しつつ、全てを委ねて歩めるよう日々祈っていこうと思います。

みことばへの再献身

古庄　英司

「心房細動です」。意識を失いかけた私に医師はこう告げました。不整脈の病でした。二度手術を受け、死と向き合いました。献身者生活 30 年目の試練。しかし、神はこの病により、献身を問い質してくださったのです。私は教会の流行に乗ることばかりを考えていました。それは聖書に聴こうとせず、聖書をないがしろにしている姿でありました。術後5年目の今は再発率 50％の時期です。人生最後の学びの時であると押し出され、聖書を聖書から原典できちんと学ばせてくださる聖書神学舎の受験を決意し、教会から遣わしていただきました。そして神の憐れみにより、学び舎の門が開かれました。一人の役員が言ってくださいました。「牧師のための学びではありません。私たちのための学びなのです」。聖書そのものから、み声を聴くことを待ち望む聖徒方のために、正しい福音を届ける使命に生き、ひたすら学びに徹してまいります。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　2013年度　卒業生　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

上段左より：原田、鈴木、馬場　　中段左より：舛田、野村、大髙、若林　　下段左より：姜、櫻井、仲田、久島

氏　名	奉　仕　先	
（聖書神学舎本科卒業）［９名］		
大髙伊作	佐倉福音キリスト教会	日本福音キリスト教会連合
鈴木俊見	キリスト者学生会中四国地区	
野村天路	生田丘の上キリスト教会	日本福音キリスト教会連合
原田帆海路	キリスト教朝顔教会	日本福音キリスト教会連合
若林義也	沼津港町教会	単立
姜明善	大磯キリスト教会	日本福音キリスト教会連合
久島香子	矢吹聖書キリスト教会	単立
仲田志保	仙台福音自由教会	日本福音自由教会協議会
舛田友太郎	愛ホープチャーチ	同盟福音基督教会
（聖書神学舎聖書科卒業）［２名］		
櫻井めぐみ	関西聖書神学校（進学）	
馬場義実	ときわ聖書教会	

ようやくスタートラインに

大髙伊作

卒業を迎えるにあたり、「達成感」のようなものをあえて感じないように心掛けています。卒業は「区切り」のように思えますが、神学生にとっての卒業は「ようやくスタートラインに立った」というだけで、アップを終えたマラソン選手のようなものです。これから神様に「ここがゴールだよ」と言われるまで走り続ける距離の分からないマラソンが始まります。ここで「達成感」など感じていてはスタートから出遅れてしまいます。4月からの奉仕を見据え、更に祈り備えていく必要があります。

と言いましても、「あと 15 年はここに居たい」と思える程“楽しく苦しい日々”でしたので、離れることが寂しくないと言えば嘘になります。良き信友が与えられ、共に祈り合い、切磋琢磨出来たことは私の財産です。

また、この証しを読んでくださっている皆様のお祈りにも心より感謝申し上げます。そして、これからもお祈りを宜しくお願いいたします。

主に信頼し、主の約束を見る

鈴木俊見

主の召しを確信し、聖書宣教会への入会が決まってから幾日も経たないうちに、妻の妊娠がわかりました。妻が働いて生活費を工面しようと考えていた私たちは、どうやって生活していこうか悩みました。そんな中、出エジプト記 16 章 12 節から、養ってくださる主に信頼することを教えられ、献身の生活が始まりました。

卒業後のことを具体的に祈り始めた頃、再び妻が妊娠したことがわかりました。どうなるのかと思いを巡らしている時、ヘブル人への手紙 11 章 13 節からどこにいくにしても、天にある、確かな主の約束はるかに見て歩むことを教えられました。

4 年間を振り返る時、いつもみことばに教えられ、主が満ちあふれる祝福で支えてくださったことを覚えます。卒業後に遣わされる場所は思いもよらなかった場所ですが、主の導きと信じ、遣わされた地で確かな主の約束を見て、主に仕える働きをさせていただきたいと願っています。

主の訓練

野 村 天 路

「この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった」という申命記の言葉の通りに、私の四年間の神学校生活は、主によって守り導かれてきました。着物がすり切れることはありましたが、新しいものが与えられました。必要は満たされてきました。満たされてきた必要は経済的なものだけではありません。学びと訓練という面においても、私にとって必要なことが与えられてきました。しかも、みことばに教えられているように、その訓練は愛にあふれる厳しい訓練でした。単身寮での生活、また研修生会での活動、そして教会奉仕、それぞれの場面で自分に欠けていることが教えられてきました。

このように、主は、私の身に余る学びと訓練を与えてくださいました。四年間の学びを終えようとしている今、私は、ますます主を恐れ、主の道に歩まなければと思いを新たにしています。祈りに覚え、お支えくださった皆様、ありがとうございました。

宣教会で学んだこと

原田帆海路

「宣教会で学んだことは何ですか？」と聞かれたら、「みことばに向き合う姿勢を学ばせていただいた」と答えるだろう。「誰かがこう言っていた」ではなく、「みことばが何と言っているのか」をひたすら追求していく学びであった。目につきやすい派手な学びではないように思う（より良い伝道方法を伝授されたわけでもないので･･･）。しかし、ここでの学びはこれから始まる牧会の働きの根幹に位置するのだと思わされる。健全な教会形成、また伝道、そして信仰生活、どれもみことばによって成される業である。「みことばが何と言っているのか」をまず聞くところから始まる。そう思うと、ここでの学びは今後の働きに欠かせないことであり、極めて実践的なことであった。この学んできたことを、どのように教会で生かしていくかは、私自身に任された課題なのだと思わされる。

主の働きの一端を担わせていただけることに感謝しつつ。

主のわざに

若 林 義 也

主が「あなたのその力で行」け、「わたしがあなたを遣わす」と言われる（士師 6:14～16）。そのみことばから召しの確信をいただき、学びと訓練の期間が与えられました。

私自身は欠けだらけでしたが、聖書の与える忍耐と励まし、多くの方の祈りと助けによって支えられてきたことを感謝いたします。

聖書宣教会で教えられたことは、信仰者としての生き方だと思います。学びと信仰を、信仰と生活を、分離させない。これは一生涯の課題です。

原文でみことばと向き合う訓練は大きな幸いでした。釈義の中で、語るべきことが与えられるささやかな経験に、感動を覚えました。聖書が語ることをつかむのは、本当に難しいと感じます。御霊の助けによりまっすぐに説き明かすことを祈り求め、みことばに向き合いたいと願います。自分自身が養われ、取り扱われながら。

卒業後、「この町には、わたしの民がたくさんいる」と言われる方のわざにあずからせていただくことを、期待しています。

幸いな者

姜　明 善

卒業を前にして思わされることは、この４年間本当に幸いな時を過ごさせていただいた、ということでした。厳しいギリシャ語やヘブル語、数々のレポートや試験がありましたが、それでもここで学んだ４年間は幸せでした。謙遜な先生方や職員の姿、祈りを共にした学年の交わり、主にある兄弟姉妹が共に生きることについて学ばせられた単身寮の生活。これらのことをこの４年間学ぶことが出来たことは、自分の人生において一番幸いな時でありました。

しかし、何よりも幸いだったのは、この４年間を通して改めて自分自身の罪深さを知り、この罪を主が赦し、主に仕える者として召してくださったことを、主に再確認させていただいたことです。この召しを最後まで果たし終えることが出来るまで自分の命を少しも惜しいとは思いませんと告白したパウロのように、私もこの告白に生きたいと願います。みことばに生き、みことばを教える幸いを学んだことを主に感謝します。

主にゆだねよ

久 島 香 子

「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。」（箴 16:3）このみことばを見る時、主にゆだねてこなかった自分の姿を示されます。四年前、自分の罪と無力さの思いの中で、主に押し出されるようにして聖書宣教会での学びに踏み出したはずでした。しかし、実際の歩みを振り返ってみると、私のしようとすることを主に完全にゆだねきっていなかったと言わざるをえません。結局、自分の考えや計画に固執していたように思えます。無力になりきれず、罪人の自覚は中途半端でした。

しかし、そのような愚かな者にも、主の溢れる恵みがありました。聖書のみことばを学ぶ楽しさ

と難しさ、そして学び続けなければいけないという迫りを受けました。また、祈ることの重要さと祈られることの助けを教えられました。背後で祈り支えてくださっていた兄弟姉妹方、聖書宣教会での学びを導いてくださった神さまに心から感謝いたします。

尽きぬ憐れみに感謝

仲田志保

東日本大震災の混乱の最中、支援トラックの帰路に便乗して宣教会に辿りついたあの日から3年間、主は私にとても良くしてくださいました。主は、母教会から祈られることがどれほどの力であるかを教えてくださり、未熟者の成長を励ましてくださる温かな奉仕教会に遣わしてくださり、学び舎には心からの祈りを分かち合う生涯の友と恩師を与えてくださり、我が内には自分さえも知らなかった罪を示してくださいました。しかし何にも勝る奇跡は、希望や感動の時だけでなく、涙や孤独の時にも、主が私から学ぶ喜びを奪わず、来る朝ごとに私の口が「主を愛する」と告白することをやめさせなさらなかったことです。主の憐れみは、尽きることがありません。

これまでのお祈りとお支えに、心から感謝いたします。しかし私の献身は、まだ始まったばかりです。みことばを愛し、笑顔を絶やさず、主と教会に仕えることができますよう、続けてお祈りいただければ嬉しいです。

懐かしの席に座り、人の尊さを教えられる

舛田友太郎

卒業が決まった夜、やるべきことは残っていつつも、私は久しぶりに、景色を眺めることができました。ベンチに腰をおろし、宣教会の中庭をずいぶん久しぶりに、ゆっくり眺めました。よくこのベンチに腰かけて、ああでもない、こうでもないと思ったものでした。

1年の時の席に座ってみたくなって、教室へと向かいました。今は「ジョニー」と呼ばれている後輩が座っている窓際の席。座って黒板を眺めると、あぁ…色んな思いがあふれかえってきました。

5年後、10年後、たとえこの教室と、この席が残っていたとしても、共に学んだ仲間との時間は、もう二度と繰り返される事はないんだということに気がつきました。いつも一緒だったので、その存在が当たり前になり過ぎていました。「人の存在って大きくて、重いんだな〜。」ぽつりと口にしました。

私の目にさえ、このように見えるなら、主の目には、どれほどひとりの人が尊く見えているのだろうか。

なんだか「人をとる漁師」としての働きが重たくなりました。

これから、一体どれだけの人と関わっていくのか…。人と誠実に向き合い、人と対話し、人の話に耳を傾け、そして主と同じくらい、人を尊く思いたい。そのように願わされました。

犠牲と祝福

櫻井めぐみ

「あなたはわたしのために何をしますか？」

この主からの問いかけを、3年の間、絶えず聞いていたように思います。宣教会での学びと訓練は、本当に、大変でした。ですが、今になって思います。「犠牲を払ってこその祝福」だと。もちろん、行いによる祝福、ということではありません。でも、主は本当に、「徹底」を求められる方なのだということを、嫌と言うほど思い知りました。自分で「結構がんばっているつもり」ではダメなのだと。いつもいつも、自分の限界を思い知らされた上で、主に依り頼んで委ねた時に、さらにその先を越えて、自分の実力以上のことをすることができたのだと思います。私がただ楽をして、なおかつ祝福を得る、ということは決してなかったけれども、その苦労は確実に報われ、その報酬は大きかったと言うべきでしょう。

自分の器を壊して、賜物が増やされる・・・それは、3年間の学びを通して、主が私に教えてくださった大切なことのひとつです。

再スタート！

馬場義実

「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。」（ピリピ3章12節）

15年前に教会音楽舎での学びを終えて卒業し、12年のブランクを経て、再び聖書宣教会の学びの場に“出戻り”をしました。思い返せば、自分は教会に仕える身でありながら、自分の学んだ知識や技術を基準にして、そこに神のみこころに照らし合わせるような、高慢な態度でいました。

再び学び舎で3年間、主に仕える者の姿を、みことばを通して教えられ、主の前に遜ることを学びました。そして、主が必要としていることに対して、いつも敏感に気づかせてくださるよう祈り求めています。相変わらず足りない者でありますが、主に、教会に仕えさせていただきたいと願っています。

図書館から

図書館長　津村俊夫

シナイ半島のカタリナ修道院で発見された「シナイ写本」。そのデジタル版が一般公開されて 5 年になります。最新の手段を用いて、古い書物の閲覧が世界中のどこからでも行える時代です。正に、ネット時代は、時間と空間の差を一瞬にしてなくしてしまいます。新改訳聖書の翻訳改訂の作業にも Skype 会議が採り入れられ、数百キロ離れた人たちが時を同じくして話し合うようになっています。

しかし、ビデオ会議と顔と顔を会わせて話し合うこととの間には、大きな違いがあります。その場の空気を感じながら、相手の顔を見て自分の意見を言うことのできる従来型の会議は、互いの理解を深めるために、なくしてしまうわけには行かないでしょう。また、シナイ半島にある、あの修道院に行って、このようなところで何世紀にも亘って聖書の写本が保存されてきたことに思いを寄せることには意義深いものがあります。

同じように、自宅に居ながらにして多くのデジタル情報がダウンロードでき、情報が簡単に手に入る時代になっても、図書館に出かけて行って、書籍に囲まれ、日常と少し離れた空間で本を手にして読むことの意味がなくなったわけではありません。あの、中世以来のケンブリッジ大学の図書館に足を踏み入れ、書物に向き合った時に味わった歴史の重みを、いま懐かしく思い出しています。図書館は単なる書庫ではないのです。

ですから、図書館で書物を手にして「じっくり」時間をかけて読むという営みはなくならないでしょう。今、ここで、過去のどこかで書かれ出版された本によって、著者と歴史的に向き合うことができることの意味は計り知れないものがあると思います。宣教会の図書館は、たった 50 年の歴史ではありますが、先輩たちの歩みに思いを馳せつつ、図書館を最大限活用していただきたいと願っています。引き続き、図書館が更に整えられていくようにお祈りください。

《ボランティア募集》

聖書宣教会の働きを主の教会のわざとして覚え、支えてくださる大勢の主の民がいてくださることを感謝しています。祈りや献げもの、そして見えるところ、見えないところで兄弟姉妹の具体的なご助力、ご奉仕によって支えられています。このたび、研修生の人数減少もあって、さらに諸教会の皆さまの応援をお願いしたくお知らせします。今の具体的な必要は次の二つですが、他にも特別な賜物や関心をもってお手伝いくださる方があれば是非ご連絡ください。

《庭と植木の管理》

美しい中庭からケヤキなどの高木まで、研修生の係活動とボランティアのご奉仕で良く管理されてきていますが、さらに強力な応援を期待しています。いつでもご都合の良い日にお出かけいただいてご奉仕いただけると助かります。

《通信発送作業》

聖書宣教会通信は、6 月、9 月、12 月、3 月に諸教会、諸兄姉にお届けしています。特定の火曜日の午後に研修生全員で行なっている通信発送作業に参加してお手伝いくださる方があれば感謝です。

（次回は 9 月 2 日の予定です。）

授業日であれば、朝 10：05 からのチャペルにもご出席いただき、12：30 からの昼食の交わりにもご参加ください。予約をいただければ昼食は提供させていただきます。ご連絡、お問い合わせは電話、FAX またはウエブサイトの「お問い合わせ」からのメールでお願いします。

編集後記

直面するさまざま変化のなかで、いつも主の臨在を覚え、恵みを数えて感謝し、また、主を恐れて静かな心で主に聴き従うことができるように、と祈らされる日々です。個々の歩みにおいても、主のからだとしての歩みにおいても、主が私たちをあわれんで整えてくださいますように。この国、この世界を主があわれんでくださいますように。（A）

発行者　岸本　　紘　　http://www.bibleseminary.jp/　　編集者　赤坂　　泉